

全校生徒とつながっている 学校新聞「平中タイムス」

●山形県酒田市立平田中学校
教諭 出嶋睦子

全国小・中学校・PTA新聞コンクールで、2年連続内閣総理大臣賞を受賞した山形県酒田市立平田中学校。学校新聞づくりに本格的に取り組んだのはわずか3年前のことといえます。今回は、担当の出嶋睦子先生に具体例をあげながら指導のポイントをご紹介いただきました。



●夢ふくらむ再出発

平成16年4月、酒田市立平田中学校に赴任した。10年ぶりの転勤。そして、学校新聞担当を命ぜられた。

新聞委員会はあるものの、行事の時にたよりを出す程度で、新聞形式のものは作っていなかった。印刷所に外注する予算もない、ゼロからの出発。私は、以前からやってみてきたパソコン新聞を実現するチャンスだと思った。外注よりはるかに速く完成する。長年の課題だった「速報性」へのチャレンジだ。「定期的な発行」もできると夢はふくらんだ。しかし、ヘルプと首っ引きでパソコンに向かう日々、見出し一本入れるのに半日かかった。

めげそうになる私に力をくれたのは、やはり生徒たちだった。新聞委員長に「今年と一緒に新聞づくりを頑張ってくださいこうね」と言ったとき、一瞬驚いた顔をした後、「はい、わかりました」と頷いてくれた。

最初の委員会でも年間目標を立てた。「新聞づくりに情熱を燃やす」だった。新聞づくりをするつもりで入ったのではない生徒もいただろう。それなのに、そんな目標を立てた生徒に、私は感激してしまった。「いい加減な気持ちではやれないぞ」と決意を新たにしました。

●基本を教える

最初の新聞（平成16年度第1号）は、内容も編集方針も私が決めた。まず、新聞とはどういうものか、どうやって作るのか、書くのか、それを教えたいと思った。

1面では、あいさつ運動を始めた生徒会執行部にスポットをあて、インタビューの仕方、質問内容のチェック、記事の書き方を一から教えた。校長先生への依頼原稿は、お願いの仕方を練習させてから行かせた。

また、「うどん作り」（4面）を取り上げることで、1年生に文章の書き方を教えようと考えた。Aさんは

記事の焦点が絞りきれず、時間の経過と共に出来事を並べただけの作文になってしまおうと悩んでいた。そこで「仲間が一番楽しかったと感じる部分を中心に」とアドバイス。うどん作りの合間の自由時間を中心に原稿を書き直した。Bさんはうどん作りの過程を丁寧に進めながら、たくさんの人にインタビューし、その様子が伝わるように原稿をまとめた。

私は、一対一で話をしながら原稿を直す作業を手伝った。

●誰が記事を書くか

担当者は編集会議で決めている。学年に関連した記事はその学年の生徒が、学校全体に関わる記事ならば上級生、コラム記事は別として、トップ記事は複数で担当。回数を重ねると、異学年同士がペアになり、下級生に教えながら取材や記事書きを共同作業する。協力して取り組む中で、一人では発見できないことに気づくこともある。

●トップ記事は新聞の顔

1面トップは、その号の顔である。企画会議では、取り上げたい記事やニュースを挙げていき、何をトップにするか考えていく。秋の大きな行事といえば文化祭だが、平成16年度第8号では、それよりも大きなテーマが会議で持ち上がった。「校歌問題」である。

毎週全校朝会で校歌を斉唱しているが、声が小さいことが生徒会で問題になり、対策が話し合われてきた。そこで、クラスごとではなく、男女に分かれて並ぶことになった。

新聞委員会では、声の大きさの変化と今後についてアンケートをとった。その結果から、Cさんは、「もっと大きくなると考えている人が多く、何を伝え、みんなで大きな声で歌っていかうと呼びかけたい」と書き始めた。D君は「やっぱり一人ひとりが声を出すことが大事。校歌の良さをわかってもらおう記事を」と提案、歌詞の難しい言葉をわかりやすく

記念すべき新生「平中タイムス」
平成16年度第1号1面(右)と4面



平成16年度第8号(右)と
平成18年第8号

い言葉に書き直す作業に入った。歌詞の意味がわかれば校歌への愛着もわくはずだと考えたからである。

●「二つの事実」を知らせる

新聞には「学校生活の事実や成果を正しく評価し、記録する」という目的があり、知っていることを記事にすることも大切だが、一方で、みんなの知らない話題を見つけ、取材することも重要だ。

毎春、地区の駅伝大会が行われる。すべての中学校が出場し、県大会を目指す。どの中学校も、選抜メンバ

ーをそろえ、学校あげての支援体制の下に参加する。選手は冬から走り込んでいく。しかし、その努力が他の人の目にふれることはあまりない。私はその努力を認めてあげたいと、思い入れのある紙面を3年間作り続けている。特に今年は、終了後にいろいろな話が聞こえてきた。

「△君は、部活の大会と重なったんだって」――後悔してないの？

「男子が黄色い鉢巻をしたんだって」――学校に鉢巻がないの？ すぐに詳しく取材するように部員に指示し

た。「〇位になりました。残念ながら県大会には行けませんでした。一生懸命走りました」といった表面的な記事だけでは深みがない。さらに取材して得たことを付け加えていくことが大切なのである。

こうした話をキャッチするには、指導教諭もアンテナを高く上げておく必要がある。一度、この様な観点で取材をすると、次からは生徒自身が「みんなが知っている事実の中の誰も知らない事実」を探し出すことができるようになってくる。

●学校新聞の目的とは

学校新聞の一番の目的は「自分たちの手で学校をよりよくしていく」ということではないだろうか。

校内にお菓子のから、ガムの食べかすが落ちていたり、ガムが落ちていたり、この問題は避けて通れないと取り組んだ。学芸祭前に、校舎の壁が壊されるといことが起こった。

「いじめ」問題も避けては通れない大きな問題だった(平成18年度第8号)。表面上は落ち着いているように見える学校も、集団で生活をしていけばいろいろな問題が起きて当然だと思ふ。そういう問題を隠さずに、事実を報道し、考えてもらう。

幸せなことに、学校長はじめ本校の先生方は、大変理解があり、「平

中タイムス」を材料に、講話をしたり、道徳の時間をしたりしてくれる。

新聞で、仲間の活躍や頑張りを紹介し、明るい学校生活をつくる。それは、新聞の大きな役割である。しかし、いいことばかりではない。違反もあるし、悪口や陰口もある。掃除を怠ける生徒もいる。でも、それ責める記事には絶対にしたくない。自分たちの問題を、自分たちのこととしてとらえ、どうしていかなければならぬかを考える、そんなきっかけになる新聞にしていきたい。

●最後に

情報を送る側として、一番気になるのは読者の反応である。新生「平中タイムス」の第1号ができあがったとき、生徒たちから「本物の新聞みたいだ」という声があがった。私は、その言葉が忘れられない。

子どもたちの様子がよくわかる、毎号ファイルして大切に保管しているという保護者の声も届く。そんな声を聞くと、子どものようにうれしくて、また頑張ろうと思う。多くの人に支えられて新聞を作っているのだと実感する。新聞づくりをしっかりと立候補する生徒も増えてきた。

これからは全校生徒と結びついた新聞づくりを通して、学校生活の充実を図っていききたいと考えている。